

会へずともまた来るねと言ひプラシーボ渡してをり
ぬ施設の母に
岸並千珠子

米津玄師と野田洋次郎がコラボした「PLACEDO」という曲が、昨年夏に話題になった。さすがが早いなと思ったのを思い出す。「プラシーボ」という語を使った短歌にはここではじめて出あった。私は「心の花」の歌稿だけではなく、毎月かなりの短歌を読んでいる。「朝日新聞」「東京新聞」「北日本新聞」への投稿歌、いくつかの雑誌への投稿歌、さらには歌壇の賞の選考会のために何冊もの歌集も読む。当然、そこで新語にであう。そのつど頭の体操だと思って、辞書を引き、ネットを検索してなんとか対応する。そんな私だが、短歌に使われたこの語にはここではじめて出あった。「プラシーボ」とは「偽薬」のこと。実際には薬効のない錠剤などでも薬だと思って飲むと症状が改善したりすることもあるという。

まなかひを白き蛾が過ぐ跳ぶものにはた飛ぶものに
春紛れなし
花 美月

春のおとずれを動物の動きに見て、なんとも楽しい。飛ぶものは蛾だと分かるが、跳ぶものは分からない。この歌の前に野うさぎの歌があるので、読者はそれをイメージすればいいのだと思う。

夕ぐれの土手走る人オレンジのシューズすとすと車
輪のごとく
藤本久里

最近、蛍光色の派手なランニングシューズが多くなった。歌の「人」もそんな蛍光色のオレンジ色のシューズを履いているのだろう。下旬、漫画チックでユーモラス。

乗り越えて行けとばかりにそびえ立つ国見の山の窓
から見ゆる
柴山与志朗

国見山という山は日本中にたくさんある。古代の王がその山に登って一帯の土地を見る。「見る」ことが支配を確認する行事だった古代儀礼に由来する。ここは長崎県佐世保市と佐賀県有田町の境に位置する国見山。今年の一連は、中学校の卒業式にかかわる一連で、上旬は卒業生へ向けられた饅頭の詞。

夏の日の暮るるとき蟬の声一瞬止みし明建神社
八城スナホ

今月のこの作者の五首は木島泉さん追悼の一連。木島さんの企画で実現した蟬が大合唱する野外での全国大会の講演会に取材した作。「連歌」にゆかりのある明建神社境内の広場に椅子をならべての講演会だった。

猫好きの木島泉さんやわらかき短歌^{うた}香りたつ白蓮の
空
宮地瑛子

これも三月に亡くなった木島泉さんへの挽歌。この「白蓮」は白木蓮のこと。「心の花」全国大会を郡上で開催したときは、木島さんをはじめ郡上歌会の人たちですっかりお世話になったのを思い出す。木島さんは一時三十四近い猫を飼っておられたほどの猫好きだった。

逝きてより何度めの電池交換か夫の腕時計と和光に
出向く
宇都宮とよ

亡くなられた夫君の腕時計を今もきちつと管理しておられるらしい。「夫の腕時計と」「と」という助詞に思いがこめられているのが読める。